

就任に当って会員諸兄へ

小川, 徹

(出版者 / Publisher)

法政大学地理学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

JOURNAL of THE GEOGRAPHICAL SOCIETY OF HOSEI UNIVERSITY / 法政地理

(巻 / Volume)

4

(開始ページ / Start Page)

4

(終了ページ / End Page)

5

(発行年 / Year)

1956-05-01

極的に動けるような大家族の体勢にすることである。私は前にこのマノ号一
実はこのノ号という呼び方はセクト的な感かして嫌いだが——に4山
万里」と題し、東亜同文書院学生に対する同窓生の親身も及びぬ援助の状況
を短く紹介し、わが法政地理同窓も後進を引き上げるようお願いしたことが
ある。今や時勢はその頭の何層倍も切迫したのである。この具体策としては
まず何をおいても昭和ノ号年 地理学科の講義開始以来、高師師、旧制新
制大学、大学院の区別なくすべての卒業生を含んじ五十音順の名簿を作るこ
とである。細かいことだがこの目的のためには卒業年次や出身学制は本人名
のあとに附けるだけで分類の指標にすることは避けたい。又就職等社会的発
言力に對して生年月日又は年令を入れることも、従来の名簿の型を取つて有
益かつおもしろいであらう。幸に内には秋岡、岡山、渡辺光、多々先生など
創立当初からの先生の要望も很強く、外には戦前の同窓生の切なる連絡希
望の聲がある。この棧を逸せず、師弟の別なく、力を協せて、正に一石三鳥
のこの現実的要望を早急に実現したいものである。

この補に書きたい地理学的諸問題をわが地理学会誌に望む事項も少なくない
が上述のことは緊急中の緊急事と考え、あえて乱文を續す述べた訳である。

就任に當って會員諸兄へ

小川 徹

昨春、光輝ある法政大学文学部地理学科の一員たることを許されてから、
丁度一年、生来の不敏に加えて十年の空白を背負ひ、そのハンディキマツ
フをいかにして償うかと、明け暮れ思い惑ひ、いわが要我選中で、その日その
日を送つてきた私です。一年の戦績はもろろん、筋力でいえば異星の連続で
いきさの極人でも取り返せず、切迫の学生未休厥も重い気持ちでおりなした
ところ、思いかけず秋岡先生のお話で、来年度（つまり本年度）から、さら
に教授として勤務すべき由、学校当局で決定されたと承つて、名譽に感激す
るに前に、責任の重大さを痛感せざるをえませんでした。もとよりノ伯の微
粒子にすぎない私です。あまりに責任を痛感しすぎるのも、かえつて、担所
からみられたらおかしなものかと思ひます。いきさら申すまでもなく、本学
地理学科は、その昔、といつても私の知る限り、いきさら又の早余年前です
が、当時数のまだ少なかつた私学の地理学科としてすでに東都に名をはせて
いたと思ひます。實際、そこに集る人々の學風において、その合理的前進
的特色は、官学に期待することのできない若々しい新鮮味となつていました。

官立のある大学の地理学専攻の学生が「法政の講義を向きたい」といつたという噂を耳にしたこともあつたほどです。多くの先生方のなかで、野口、田中館両先生は惜しくも地獄されたとは申せ、考えてみますと、本学地理学科の陣容は、その当麻の特色をさらに失つてはいないようです。もちろん、かつての新進学者も、いまやようやく斜陽グレイ(?)の嘆きをかこたれる中堅碩学となられたようですが、それは肉体の外観のこと、その頭脳の肉体はさらに若々しさを失われていないところか。一段と鋭いさえを見せておられるのではありますまいか。さらに、今日の法政地理学科は、いまや教室の長老ともなれた諸先輩の昔にくらべて、なんら逊色をみない新進の若手がくつわを並べておられるのです。私などはしよせん「枯木も山のにぎわい」であると自覚し、もう少し楽な気持で、諸先輩、諸同学の庇護に甘えながら、ぶるまかきりのお手伝いをするのができれば、それでよいのだと考えている次第です。それにつけても、当時学窓を築立つて、いま社会の各方面に奮闘せられつゝある法政地理学科出身の諸兄には、この際心から今後の御交誼をお願いして止みません。私は「法政一軍生でありますので、ほとんどの方のお名前もお願ひ知りませんが、これからはせむ親しくお願ひします。本軍は学部の新入に加えて、大学院もオノノの卒業生を世に送りましたがそのうちの名きでは「富士見ツ子」です。これらの新人について、諸兄の先輩としての御高導を、私からもお願ひしておきます。尚もなほ日本地理学会の1956年夏総会なるに春季學術大会が、新装の香も失せやらぬ本学の校舎で開催しようとしております。

向學の心に燃える諸兄が、この機会に、奮つて大会に参加されることを期待しなから、駄文を草して、私の使命のごあいさつと致します。(1956.4.11)